

思考や認識などの「こころ」に関係した心理的概念であり、一方、命や生命は「息（氣息・生氣）」に由来する呼吸概念だと考えられるからである。もう一つの靈魂觀念の起源である「自我」觀念は日本語には希薄であると思われる。しかし、先の二つの靈魂觀念の古来よりの伝統は今でも確かに息づいているということが出来る。

問2～4で問うた生の色、死の色、死後の色のイメージについてであるが、生の色は赤が最多（一八％）で、以下に白（無色・透明含む）、青、黄、灰、オレンジ、緑、黒、ピンク、茶、紫と、少しずつ％を減らしながらつづくのが特徴であった。有彩色が計三割いる一方で、白（一五％）と、また、灰と黒を合わせた数（一五％）である無彩色の合計も計三割になる。これは暗い生だけでなく、同時にこの生の黒は神聖、莊嚴、繊細、洗練されたスタイリッシュな肯定的パワーを表すのではなからうか。灰は恐らく迷いや疑いなど自信のなさや不安定感・不完全感を表しているように思われる。なお、これらの色を回答した理由も自由記述してもらったので、それらの質的調査は別途行いたい。死と死後の色は黒と白が多い（死は黒、死後は白が多）が、死後は死よりも全体として明るいイメージであるのは特徴的であった（全回答の明／暗と派手／地味の四局面における分布をダイヤグラムで表示）。オレンジが死の色の回答には欠如することから、それは逆に生を証明する色と位置づけられる。また、数％の少数ながら、どの問にも必ず「紫」を回答する者が存在する。紫は古来特殊な色であるから、靈性を特徴づける色であると言うこともできよう。

「迷宮」図像群とスピリチュアルケア

中 島 和 歌 子

迷宮 (labyrinth) 図像は、古代地中海世界を起源とするきわめて古い歴史を有するかたちであり、一九九〇年代以降は特にアメリカを中心として、スピリチュアリティの文脈における瞑想や祈り、ヒーリングのツールとして普及が進んでいる。世界各国の迷宮を登録・検索できるウェブサイト、ワールドワイド・ラビリンス・ロケーターによれば、二〇一一年八月末の時点での総登録件数は約三八〇〇件（うちアメリカ約三〇〇〇件）である。設置場所による絞り込み検索を行うと、「教会もしくは礼拝所」が約千五〇〇件、「公共の場」が約五〇〇件などといった結果を確認することができる。現代のスピリチュアルケアを考察する一助として、右記サイトの「病院、ホスピス、ヘルスケア」カテゴリに属する約一四〇件の事例がひとつの手がかりとなる。

医療施設等に設置されている、所謂ホスピタル・ラビリンスと呼ばれるこれらの設備は、グリーフケアのため、あるいはカタルシスの場、セルフケアのツールとして、施設内の庭等に作られている。迷宮が、その通路を患者あるいはその家族が歩くことによって様々なスピリチュアル・ペインを軽減する効果を期待されて作られ、利用されている状況については、ジェフ・セイワドの報告などにも詳しい。こうした事例においては、迷宮図像はホリスティック・ヒーリングの一環として位置づけら

れていることが特徴的であり、その他多様な代替療法とともに選択肢として提案されている場合が多く確認できる。また、イリノイ州のカウンセラー、ニール・ハリスは、セッションにおいて迷宮図像を使用する試みを行っており、心理学分野やセラピーにおける迷宮の利用にも注目すべきと考えられる。

なお、ホスピタル・ラビリンスの殆どが二〇〇〇年代以降のアメリカにおいて設置されているものの、これらに先駆けて九〇年代から、医療やケアの施設において迷宮が利用され始めていた例が数件存在している。ホリスティックな生へのアプローチを目的として、瞑想、祈りのワークショップなどを行っているテキサス州の施設 Saint Mary's Seton Cove Spirituality Center では、一九九四年に迷宮が設置された。この施設における迷宮解釈は、人類の持つ最古の瞑想と変容のためのツールのうちのひとつであり、永きに渡って祈り、儀礼、イニシエーション、精神的成長のために使用されてきた図像、というものである。ホスピタル・ラビリンスの受容のみならず、近年のスピリチュアリティにおける迷宮の普及においても共通する点であるといえようが、迷宮図像にどのような意味を読み込むかという視点に対して、図像の有する歴史の概要が示されても、象徴的意味について提案者からの明瞭な判断は控えられることが殆どであり、やや漠然とした印象を覚える。だが、逆にその曖昧さが、迷宮を歩く現代の人々の抱える多様な問題のそれぞれを個別に引き受けられる柔軟性を生んでいるとするならば、ケアにおける迷宮図像の可能性や今後の活用事例には今後も注意を払ってしかるべきではないだろうか。

最後に、二〇一一年三月に発生した東日本大震災への反応として、迷宮を歩き、犠牲者や遺族に祈りを捧げるという趣旨の催しがアメリカ、バハマなどで複数行われたことを付記しておく。世界規模の自然災害等の発生時におけるこのような迷宮の利用は、グローバル・ヒーリング・レスポンスと名付けられており、二〇〇五年に発生したハリケーン・カトリーナをきっかけとして発生した活動である。スピリチュアルケアの定義に関してこの場で議論を行うことはできないが、被害者の痛みそのものを直接ケアするという形態ではなく、被害者の痛みに寄り添おうとし、痛みに想いを馳せるといったケアの在り方についても示唆を与えてくれる事例であるように思われる。

追憶の匂い

——むかしの香にぞなほにほひける——

吉村 晶子

副題の「むかしの香にぞなほにほひける」は、『土佐日記』で「ある人」が詠んだ一首の下の句にあたる。上の句は「君恋ひて世をふる宿の梅の花」。都へのぼる一行が差しかかった渚の院に咲く梅の花の香から、かつてこの主であった故惟喬親王を思慕しつつ詠まれた歌である。住む人が変わっても、訪れる者が変わってしまったもそこにありつづける景物は、しばしばこのように過ぎ去りし昔日を追想されるものとして歌に詠まれてきた。『古今集』や『百人一首』でも有名な紀貫之の歌